翻　訳

ヤーコプ・グリム
「伝説の、詩および歴史との関係についての考察」
（『隠者新聞（孤独の慰め）』19・20号、1808年）――（試訳）

Jacob Grimm, Gedanken, wie sich die Sagen zur Poesie und Geschichte verhalten. Zeitung für Einsiedler (Tröst Einsamkeit, herausgegeben von Ludwig Achim von Arnim) 1808 no. 19. 20.

稲　福　日出夫

訳者まえがき：

以下に訳出を試みたのは、ヤーコプ・グリム（1785-1863）の最初期の論文のひとつである。彼はその小論を、アヒム・フォン・アルニムが編集していたハイデルベルク・ロマン派の機関誌『隠者新聞（孤独の慰め）』に寄稿した。私は、その雑誌を未だ手にしたことはないが、この論文は、彼の『小品集』第1巻に収められている。Jacob Grimm, Kleinere Schriften, Bd. 1. Hildesheim 1991, SS. 400-404.

マールブルグ大学法学部の卒業試験を受けることもなく、いわば自主退学のような形で母親や弟妹の住むカッセルに戻ってきたヤーコプは、しばらく不如意な生活を送らざるをえなかった。その頃、ヤーコプは、学業を終えた弟ヴィルヘルムとともに、ブレンターノやアルニムらの影響もあって、メルヒェンの蒐集に興味を覚え、また、古ドイツや中世文学に関心をもった。1807年、兄弟は共に、『新文学報知』（Neuer literarischer Anzeiger）に寄稿を始めた。ヤーコプはその雑誌に、「ニーベルンゲンの歌について（Über das Nibelungen Liet）」「職匠歌と中世の恋愛歌試論（Etwas über Meister- und Minnegesang）」「古伝説の一致について（Von Übereinstimmung der alten Sagen）」「中世の恋愛歌が職匠歌である

ことの証明（Beweis dasz der Minnesang Meistergesang ist.）」等を発表している。翌1808年、アルニムが主宰する雑誌『隠者新聞（孤独の慰め）』が刊行された。グリム兄弟もそこに同人として迎えられ、ヤーコプはそこに「出版詩の成立（Entstehung der Verlagspoesie）」、また、この「伝説の、詩および歴史との関係についての考察」を寄せている。しかし、「ハイデルベルク・ロマン派のこの機関誌は、1808年の4月1日から8月30日までしか発刊されなかった」という。こうした論文の表題から、初期のヤーコプの関心方向を窺うことができるであろう。これらは大体において短いものであるが、そのなかで、ここに訳出を試みた小論は、「ヤーコプ初めての総論的著述」ともいわれている。ところで、1808年といえば、兄弟が母親ドロテーアを亡くした年である（5月27日）。その後ヤーコプは、一家の長として、フランス人ジェローム王のもとで職を得ることになるが、それらと相前後して、これらの論考を執筆、発表していたことになる。なお、有名な『子供と家庭のためのメルヒェン集』（グリム童話集）初版の第1巻が公刊されたのは1812年12月である。

さて、この論文で特徴的なことは、ヤーコプが「自然詩（Naturpoesie）」と「芸術詩（Kunstpoesie）」を区別し、天賦の才をもった芸術家個人に根ざす芸術詩・創作詩に対して、民族に根ざす自然詩・民衆詩を賞賛している点である。「民族叙事詩や民謡や民話や伝説などのように、民族の心からひとりでに生れた自然文学を、即ち民族文学を、個人の心から生れた創作文学より珍重している。むしろ偏重しすぎた傾きがある」（高橋健二『グリム兄弟』新潮社、1968年、62頁）。

そうした初期のヤーコプの詩論、文学観は、後の彼の法学観、また、1846年にフランクフルトで開かれた第1回ゲルマニステン大会における講演「厳密でない学問の価値について」にも投影されているように思われる。彼はその講演で、数学や物理学などを「厳密な学問」と呼び、歴史学、言語学、法学を「厳密でない学問」と呼ぶ。それを区別するメルクマールのひとつは、要するにその学問が普遍的なものであるかどうか、民族的なもの、民衆の心に触れているかどうか、という点にあった。厳密な学問は、普遍的ではあるが民衆の心に触れることはない。それに対して、厳密でない学問は、普遍的ではないが現実とかかわり民族・民衆の心に触れている、というのである。そこに固有の価値を見出すことをヤーコプは提唱していた。

ところで、ここでは一般的に、ポエジー（Poesie）には「詩」を、ザーゲ（Sage）には「伝説」という訳語をあてた。しかし、ヤーコプの文脈において、ポエジーとは生のことに他ならず、ザーゲとは、あらゆる口承伝承をさす集合概念をさす。「いわゆる『伝説』という意味で用いられる術語としてのこの語の使用が固まってきたのは、『ドイツ伝説集』（1816/18）以降のことである」（永田善久）という重要な指摘があることを記しておきたい。堅田剛の著書とともに、永田善久のヤーコプ・グリムに関する一連の論考、とくに「歴史性／超歴史性の弁証法－ヤーコプ=グリムのポエジー観」（『詩・言語』49号、1995年）は、訳出するにあたって大変参考になった。記して謝意を表したい。ヤーコプのこの論文は、彼の『小品集』で５頁分の小論ではあるが、それでもなお、私の思わぬ誤解があるやもしれない。ご指摘くだされば ありがたい。

ヤーコプ・グリム「伝説の、詩および歴史との関係についての考察」

われわれの時代には、民謡・民族歌謡（Volkslieder）に対する深い愛が芽吹いている。それはまた、伝説（die Sage）［口承伝承］に対する注意をも喚起するであろう。伝説とは、民謡が歌われるその同じ民族や民衆のあいだで広く伝わっており、また、そこには幾つかの忘れ去られた場所の記憶が保管されてもいるのである。あるいはむしろこう言ったほうがいいのかもしれない。（伝説が、歌謡をも呼び覚ましたとき）、歴史（Geschichte）や詩（Poesie）の本質、その生き生きとした姿を見抜く知識を手に入れることによって、これまで取るに足りないもののように思われていた事柄を消滅させてしまってはならない、と思うようになったのであり、実際また、それらを一緒に蒐集するのにもっとも良き時代が到来したのである。

ひとが、その思うように議論したり規定したりすることは一切構わない。が、あらゆる種族、あらゆる地方において変わることなく拠り所とされてきたもの、それは、自然詩（Naturpoesie）と芸術詩（Kunstpoesie）の区別である。（叙事的なものと劇的なもの、あるいはまた、教化されてない人々の詩と教化されている人々の詩）。そこには次のような意味が含まれている。つまり、叙事的な詩においては、

主人公の所業・行為（Tat）と実際に生じた歴史物語とが、さながら或るひとつの声を発しているようなものであり、その鳴り止むことのない言霊は民族全体（das ganze Volk）に響き渡るのである。そのために自覚的であったり努力を払うとかといったことなどせずとも、そうした作為なしに、それでも義理堅さや純朴さ、また無邪気さが、その叙事詩には失われることなく保持されている。そして、こうした叙事詩は、民族共通の、かけがえのない宝物を提供し、そして誰もがその分け前にあずかるのであり、ただそのためだけに保存され続けるのである。それに反して、芸術詩が伝えようとするのは、或る作者の人間的な心情表現、彼個人の内面性である。つまり、芸術詩は、或る作者の人生の営みから得られた彼個人の体験や考え方を世間に注ぎ込み、広く世の中に知らしめるということにほかならない。しかし、たとえそうであったとしても、そうした事柄が世間一般にひろく受け入れられるというわけではなく、それにまた、その作者としても、自らが表現したものに関して、世の中全体に了解されることを望んでいるわけでもない。それゆえ、自然詩と芸術詩の姿形は、内実においてこのように異なって映るのであるから、それだけますます、この両者の詩型は、時代的にもかなり隔たって出現したと考えるのが当然であろう。自然詩と芸術詩が同時に、われわれの前に姿を見せたということはありえない。尊大さというものは、みずからのその気分だけを夢想することができるだけであるが［あるいは逆にいえば、叙事詩は、自ずから創り上げられるしかないのであるが］、芸術詩の個人によるそうした思い上がった気持ちが、叙事詩を構想したり、否、でっち上げようとすることほど倒錯したものはないのである。

さらに、詩と歴史は、諸々の民族にあってそれが未だ若々しい初期の頃には同一の川を滔々と流れていたということが判明している。ギリシア人のホメロス（Homer）は、当然にも歴史の父として賞賛されているのであるが、もしそうであるならば、いにしえのニーベルンゲン（die alten Nibelungen）のなかに、ドイツの歴史の最初の輝きが永きにわたって覆い隠されたままになっていると考えたとしても、われわれは、そのことに関しもはやこれ以上疑いの念を抱くわけにはいかないのである。

しかし、教養というもの（die Bildung）がその間に踏み込んできて、しかもそれが、間断なく、ますます幅を利かすようになってしまった。そうしたことが起こっ

てしまった結果、詩と歴史とは互いに区分されるようになり、そこで、古い詩は、それが本来もっていた国民性（Nationalität）という一心同体的社会から、教養などに頓着しない一般民衆、庶民（das gemeine Volk）のもとへ逃れ、そこに身を隠さざるをえなくなったのである。そして、その庶民のもとにあって、古い詩は決して衰退していったわけではなく、脈々と受け継がれ、裾野が広がっていった。しかしそうは言っても、古い詩を保持していくことに対する制約、圧迫は、教化されている人々、知識階級とかの人々から発せられる避けることのできない影響力によって、ますます強まってきた。他方でまた、彼らのもつ影響力から身を守り、それに対して抗う方策が、教化されてない人々、庶民の側にはなかった、というのが実情である。

これが、民族に由来するすべての伝説が辿ったであろう偽らざる経緯、事の進展である。そのことは又、歌謡に関しても同じことがいえるのであるが——。それ以後、伝説についての考え方が、以前とは幾分違った方向で捉えられるようになった。つまり、民族に由来するすべての伝説が、その本来の民族伝説（Volkssage）すなわち国民共有的伝説（Nationalsage）から、一般民衆、庶民のあいだで流布する民族伝説（Volkssage des gemeinen Volks）へと変容していったのである。が、わたしとしては、教化された人々、教養ある人々によって着想され案出されたものが、長期にわたって絶えることなく民族・民衆のなかで流布するようになった、とはどうしても信じることはできない。あるいはまた、庶民が語り継いでいる伝説やその典拠といったものは、実は、そうした教化された人々、教養ある人々の着想に由来するものである、というふうに考えることなどできないのである。

純真で義理堅きもの（Treue）を、伝説のなかに見てとることができる。それはほとんど疑う余地のないことである。伝説は、おのずから言い表され、広く伝わっていくものである。そして、時代や登場人物は単純明快であり、そうした状況設定のもとで、伝説は広く鳴り響いていくのである。それはあたかも、案出され創作されたものはすべて、そのこと自体よそよそしいものであり、実際また、伝説にはそうしたものは何一つ必要としない、といったふうである。民族の古き時代において、自然の不可思議さに関する彼らの見方によれば、そうした摩訶不思議はまさしく真実と映ったのであり、それだからまた、古代人によってそのように表現されてきた

のである。そういった点からすれば、伝説のなかには、われわれは本当のことではないと感じてしまうのであるが、しかし彼らにとって本当でない事柄は、一切存在しないのである。幽霊、小びとたち、魔法使い、そして怪物などの伝説に含まれている不思議さのなかに、秘かにではあるが、本当の理由が埋蔵されていて、その前では、われわれは心の中に畏怖の念を抱くのである。そして、純粋な心情に潜むそうした畏れの念は、教養とか教化されるということによってぼやけてしまい消えてしまうということは決してないのであり、むしろそうした畏れる心は、あの隠された真実を解きほぐして、充足感をもたらしてくれるのである。

わたしは、こうした民族伝説を知れば知るほど、多くの事例において、同じ内容の民族伝説が広く伝播していることに対し、奇異の感じを受けることが少なくなっていった。まったく別のさまざまな地域で、登場する人物名や時代を変えながら、同一の歴史・物語が語り伝えられているのである。しかしまた、各々の場所において、もともと同一の伝説が、それぞれの地方や土地に相応しいように、またそこの習俗を採り入れたような、新しい話として語られる。その結果、ひとは、そのことに関して、伝説というものは、あたかも、一風変わった種族のもとで未開の時代の異様な喧騒・嗾け（eine anderartige Betriebsamkeit）によってもたらされたかのような推測をたてるに違いない。しかし、民衆のなかにそれほどに伝説が満ちているのは、以下のような理由による。つまり、もともとあった伝説の名称、時代、外見上のことがらなど、そういったことに対しては何ら頓着することなく、無邪気に、或る時代に移し替え、そして、その民衆にもっとも相応しいように名前や場所をすり替える、といった点にある。しかし、清廉な内容を転化させ、消し去らせることは決してしないのである。そこでまた、語り継がれてきたものが、実は、よその国からもたらされたものであるということを民衆は嫌がるのであるが、そうした関連性が見出されたとしても、内容を損なうことなしに、数世紀にわたる伝承のなかで濾過されるのを待ったのである。それゆえ、個別的に、各々の伝説の文字どおりの起源を探り出すことは不可能である。というのも、その起源を探り当てたと思っても、絶えず、より古い痕跡に出くわすという嬉しい状態が続くのである。それに関しては、わたしはかつて他の論文で幾つかの例証を紹介したことがある。

それにまた、伝説にしばしばみられる脈絡のなさや不完全さといったものも、驚

くにあたらない。というのも、伝説は、原因と結果や諸々の出来事の関連性に対して、それを気に掛けるということがまったくないからである。あたかも一風変わったよそ者がそこに突っ立っているかのようである。ひとは彼らをまったく知らないのであるが、それにもかかわらず理解できるのである。

伝説のなかに、民衆は、自然のあらゆる現象によって育まれている彼らの信仰（Glaube）を書き留める。そして伝説を、民衆にとって想像もつかないほどの神聖なるもので充分なる救済をもたらすと思われる彼らの宗教（Religion）と編み合わせるのである。

他方また、伝説に対して、それを受け継ぐ彼らに相応しいよう綿密に手直しされるその民衆の手の加え方は、彼らの風俗習慣を解明することになる。逆もまた言えることであり、民衆の風俗習慣が、伝承の仕方を明らかにする。伝説には不運なめぐりあわせに陥る隙間などどこにもなく［どの民族にも連綿と受け継がれていった］のである。

ところで、生命・生活（das Leben）を生き生きと把握し、根底的に捉えることのできるのは詩だけである。もしそういったことが言えるとするならば、ここであらためて、こうした伝説を蒐集することが詩にとって役立つかどうか、といったことを吟味する必要もないだろう。というのも、伝説は元来詩そのものである、ということは、晴れわたった明るい天空は青いものである、というのと同じくらい確かだからである。さらに、希望を述べるとすれば、詩の生んだ歴史・物語は、もっと次のことを詳細に示さなければれなければならない。つまり、われわれの古ドイツの詩という遺跡の全体は、伝説に基づく生き生きとした土台の上にのみ建っているということ、また、これらの詩の固有の価値についての判断基準は、その詩がこの伝説という土台に多少なりとも背いていないかどうか、という点に向けられなければならないといったことが、もっと詳しく明らかにされなければならないであろう。

別の側面から述べるとすれば――。歴史は、民族の生命・生活や民族の生き生きとした活動や営みを伝えるものであり、またそれを語ることができるのであるから、諸々の伝統が歴史に対しても、どれほど親密に係わり合っているかということは充分理解できる。そして、これらの伝統、すなわち、諸々の伝説は、緑の樹木、瑞々しい河川、純粋な音色である。それとの対比でいえば、これまでのわれわれの歴史

は、不毛で生彩が無く、混迷状況に陥っている。そして、この歴史のなかではいずれにせよ、かつての国民（alte Nationen）の自由な戦いを描く代わりに、あまりに多くの政治的策略が労されている。われわれは、歴史に対しても、それの本来の用途・使命を見誤って、その価値を損なってはならないのである。古ドイツの戦闘の言い伝えを除外して以来、実際にわれわれの歴史に採り入れられ、ある意味では、こうした伝説と対立し、伝説を軽蔑して切り捨ててきた批判的原理は、元来、不当なきっかけから持ち出され、有害な結果に終わったにもかかわらず、いまだ、歴史史料、古文書、年代記の他にもなお真相を伝えるものが存在することに気づかないままでいる。その原理はきわめて無批判的である[①]。そして、もし歴史が、大勢の人々（die Menge der Zahlen und Namen）の係わりなしに容易に維持され保たれるとするならば、われわれは、その意味では民衆のことを考慮に入れる必要はなかったであろう。が、実際にはそうではないのである。すでに述べたように、伝説は、その表現方法や外観のあらゆる面において、つねに無造作で細部に頓着しない。しかし、そうしたことが見出されるとしても、それでもなお、全体においては、必要とされている内奥の生命（das innerste Leben）なのである。もっと正確な表現をするならば、わたしは次のように言いたい。伝説は、たとえ確実さを欠くとしても、そこには真相が含まれている。伝説を、蒐集され蓄えられた歴史史料と一致させるということは、なるほど、きわめて僅かの場合にしか成功しないだろう。したがって、この試みは、われわれを一方では、無用な骨折り、むなしい熱意へと向かわせかねない。同様にそうした企ては、他方でまた、たいへん苦労し、同時に多大な犠牲を払って手に入れたわれわれの歴史の確実性を、伝説という漠然としていて不確かなものと混合することによって危険にさらすという馬鹿げたことにもなりかねない。しかし、それでもやはり、歴史は人類のもとで生起し過ぎ去ったすべての素晴らしいことや偉大なことの守護者であり、悪事や不法事に対する人類の勝利を見届ける番人以外の何ものでもありえないということを生き生きと率直に捉えたものにあっては、根本において、何ひとつ伝説が失われているわけではない。そのことによって、各々の人々や民族全体は、かすめ取られることのない埋蔵物によって喜びを覚え、助言を与えられ、慰められ、勇気づけられ、お手本を手に入れるのである。それゆえ、一言で述べるとするなら、もし、歴史が叙事詩（das Epos）

を持つという以外の他の目的も意図も持ちえないとするならば、歴史は、政治学や法律学、さらには他の様々な学問の侍女（eine Dienerin）であるとするこれまでの考察の仕方を止めなければならない。そして、最終的にこうした歴史の利点・長所を手に入れることは、民族伝説の知識によって容易になされうるのであり、時とともにしだいしだいに獲得されうるものである。

① ミュラー（Jon. Müller）が、まさしく同様の考えを述べている。その箇所を引き合いに出すことは私の喜びである。buch 1, cap. 16, note 230. buch 1, cap. 10, note 115. buch 4, cap. 4, note 28.

（2004年10月24日）